

【令和元年度 第2回港区史編さん委員会 会議録 要旨】

令和2年1月24日（金）

午後6時30分～7時20分

区役所4階 庁議室

【委員】

出席者：井奥成彦委員長 田中秀司副委員長 岩淵令治委員 都倉武之委員
唐木富士子委員 小林元子委員 野尻三重子委員 渡邊仁久委員
有賀謙二委員 星川邦昭委員 北本治委員

欠席者：小林靖彦委員、小柳津明委員、青木康平委員

【事務局】 総務部総務課

【傍聴者】 なし

次 第

- 1 開会
- 2 議題
(1) 港区史刊行スケジュールの変更について
(2) 刊行概要の変更について
- 3 その他
- 4 閉会

配付資料

- 資料1 港区史刊行スケジュールの変更について
資料1-2 港区史全体スケジュール
資料2 刊行概要の変更について
資料2-2 通史編 フォーマットイメージ
資料2-3 刊行概要
参考資料1 港区史編さんだより特集号
参考資料2 執筆者名簿

【決定事項】

- ・令和2年3月末に刊行予定の自然・原始・古代・中世・近世編及び図説版について、刊行時期を令和2年10月に変更する。変更にあたっては、編集体制の強化、工程を厳守する。
- ・区史へのいざないとなるリーフレットを令和2年3月に発行する。
- ・刊行概要について、1ページあたりの文字数を800字から960字に変更し、吊り見出しを見出しにする。数字については、原則として縦書きの場合は漢数字、横書きの場合は半角算用数字とし、キロメートル表記はkm、参考文献については、本書巻末または章末に参考文献のページを設けることに変更する。
- ・原始・古代・中世～現代編の組体裁に「口絵はカラー」を追記する。（資料編も同様に追記）

議事要旨

1 開会

2 議題

(1) 港区史刊行スケジュールの変更について

資料1及び1-2について説明。

委員：スケジュールの見直しは、監修者・執筆者としては、間に合う時期に原稿は出したわけなので、編集体制に問題があったということだと思う。編集体制を確保していただいたが、提示された工程どおりに作業を進めていただかないとスケジュールどおりとはならない。監修者も最大限努力するが、委託事業者にも編集体制を強化していただき、工程を厳守いただくようお願いしたい。

委員長：それでは、「港区史」刊行スケジュールの変更については了承ということで良いか。

<異議なし>

議題(1)については、原案のとおり決定する。

(2) 刊行概要の変更について

資料2、2-2、2-3について説明。

委員：原始・古代・中世～現代編がモノクロであることは承知しているが、冒頭にカラー口絵が付くことを、刊行概要の組体裁のところに書いてもよいのではと思う。

事務局：口絵はカラーということで、刊行概要に明記する。

委員長：他に何かご意見・ご質問はないか。特になければ、了承ということで良いか。

<異議なし>

議題(2)について、原案のとおり決定する。

3 その他

区民インタビューの予告編(5分程度)を上映

事務局：11人の方のインタビューを5分程度にまとめたが、一人25分ぐらいのインタビューも公開しており、非常に貴重なお話をいただいている。「編さんだより」の表紙にあるURLから入ると、実際の動画を見ることができるので、ぜひご覧いただきたい。

委員：とても懐かしい風景やお話は身近に感じられたが、全部、男性で違和感があった。その当時の女性の生活の大変さやものの感じ方も違うと思うので、そこが残念だった。

事務局：各地区総合支所にインタビューをする方の推薦をお願いし、まず挙がってきた方が男性だけだったので、今年度はその方々にインタビューをしたが、来年度に向けては、女性も含めていろいろな方にお話を伺っていきたいと考えている。

委員：このインタビュー自体は、港区史の本文とは完全に別に動いている事業だが、これ自体は、誰がどう決めていて、人選はどういう過程で決められているのか。内容的には、私は近代を担当していて、関わる部分が多々あり、本文の執筆とは、直接、連動していないとしても、同じ事業のものとして見られるので、事前に共有していきたい。

事務局：区民インタビューは、編さん過程の公開の一環で行っている。人選については、5つの総合支所から、歴史を語ってもらえるような方ということで、推薦をもらった。今

後、近代・現代の執筆とどう関わっていくかっていうところもあるので、なるべく早いうちに、意見交換をさせていただければと思う。

委員：このインタビューの内容を本文に使えないかという話もあったが、インタビューされた方の話を概説的に、通史を書く中で取り上げるというのは、違和感がある部分もあるので、そういう形で取り上げるのは難しい。

委員：区民インタビューについて、監修者は全く関係していない。女性が選ばれていない問題も、どういう基準で選んだかについて、全く監修者は関わっていない。ホームページでは、「港区史」とは別で「港区のあゆみ」にして、「港区史」の事業と分けるということになっているはずである。しかし、「編さんだより」の第3号にインタビューが掲載されているので、ほぼ区史と一環のものに見えるし、リーフレットに区民インタビューを入れる話も、それは区史とは違う窓にしたはずなので、違和感がある。

研究者としてインタビューするのは、研究的なところでいろいろ質問をしたり、人選したりというのがあるので、視点が違い、今回の区民インタビューが同じ一体のものとして出てくることに、非常に違和感がある。少なくとも、リーフレットでの出し方を工夫していただくなど、今後、近代の部会、近現代の部会に、事前に相談して、少し協議していただかないとまずいと思う。

委員長：本編とコラムというような分類でいくと、これはコラムに当たるような、そういう位置付けでどうか。そういうところを、今後、明確にしていく形で扱っていけばいいのでは、と思う。

事務局：ホームページの中での公開の仕方も含めて、実際のものをご覧いただきながら、調整させていただきたい。港区の歴史を感じていただくという意味で、区民の方のお話を語り継ぐものとして、貴重なものと考えている。刊本の区史本体との位置付けについては、調整させていただきたい。

委員長：その辺りは、今後、相互に意見交換をして、共にいいものにしていただければと思う。

委員：区史というのは、私はもう70年、ここで生活して生まれ育ち、親も生まれ育って、いろいろな歴史の中で、大変、自分と関係が深く、興味・関心が深い。他の歴史書を見るのとは違い、自分史もそこの中から読み取っていくものになる。

区民インタビューは大変慣れ親しんでいるものが出てくるが、「港区史」で作られようとしているものが、研究者の視点の専門書であるのは、区民にとっては、立派過ぎなくていいという願いはある。立派なのはとてもうれしいが、立派過ぎるのはなじめなくなってしまう。身近で、親子や三世代の中で、区史を開いて、専門的・学術的なものはそこで理解していくが、生まれ育ったところの、身近な書籍であってほしい。各家庭が買うことはできなくても、図書館に行けば触れられる、学校の図書館にもあるというようなものであってほしい。

委員長：そういうご意見も、本当に重要と思っている。高度な水準を保ちつつ、親しみやすいものというものが理想的なものなので、そういうものに向かって、監修者も努力していかなければと思っている。

委員：研究者の独り善がりなものを作ろうというつもりはないが、その点でいうと、どう活用するかということが、計画にあまり入ってないと思う。例えば、港区史を刊行した後に、区民向けの講座であるとか、区民の方がどう使っていただけるかっていう工夫を、他の自治体史では行っている。区史が刊行して終わりではなくて、できたものをどう活用し、

集めた資料をどう活用できるか、区民の皆さんが使っていただけるかという場を、つくらなければいけない。自治体史では、集めた資料を公開するセクションをつくることもある。そういった、活用の部分が、まさに重要で、監修者も努力するが、独り善がりなところもあるかもしれないし、そこをどう、区民の皆さんとの間を埋めていくかというのは、非常に大事だと思う。そういったところも本来は計画していかなければいけない。

委員：区民インタビューは、確かに、女性の目線が足りない。女性の立場のほうが、私としても聞きたいと思う。インタビューに出ている「末げん」さんの奥さんの話で、三島由紀夫さんのくだりも、別のところでお話しされていたのを思い出し、そういうのも聞ければ良かった。

副委員長：区史と区民インタビューをどう進めるかという切り口は工夫しないといけないが、「港区史」の編さんに当たっての基本的な考え方を定めているので、それに則った形でやっていくというのが基本である。

区民インタビューは、区史の編さんを契機にして、町場の人話を語り継いでいこうというところが、基本的な考え方であったはずなので、区史ではない。生活者の視点として、どのように時代を見てきているのかという人々の声をしっかりと残したいというところがあったので、そういうところで、整理をしたらどうか。

インタビューに当たっては、今は男性ばかりとなっていて、後で女性ばかりになってしまうと、ちぐはぐな印象を与えるので、男女平等の視点も含めて工夫が必要である。

委員長：集められているインタビュー自体は非常に貴重なものだと思うが、位置付けの問題があり、今後のインタビューについても考えていかなければならない。

5 閉会